

ナウル語文法ノート ③

Notes on Nauruan Grammar Part 3

岡村 徹

Toru Okamura

公立小松大学

Komatsu University

過去2回は、ナウル語の重複現象と他動性について取り上げた。第3回目は、ナウル語の前置詞について、Kayser の資料を基に、その概要を記す。

Kayser (1993) によると、ナウル語の前置詞は大きく二つに分類される。一つは、純粹形前置詞 (pure prepositions)、もう一つは派生形前置詞 (derived prepositions) である。

前者の例として、

(1) ea, for

(2) ean, on

(3) atin, from

(4) aut, over

Kayser (1993: 195)

などがある。

後者の例としては、下記の(4)と(5)があり、名詞とともに使われている。

(4) oagu, house for me

(4') -um, -for you

(4'') -in, -for him

(5) baiu, thing for me

(5') baim, -for you

(5'') bain, -for him

Kayser (1993: 195)

次に、副詞的なものと共に使われる用例もある。

(6) ituga, above

(6') itugaiu, above me, -you, -him

(7) ijon, beneath

(7') jonu, jonum, jonin, beneath me, -you, -him

Kayser (1993: 195)

上記(4)～(7)は、所有を表す接尾辞 (suffix) を伴う。

さらに、接頭辞 (prefix) 由来の *in* と *an* を使うこともある。

(8) in-i-bao, in my hand

(9) an-e-bao, on my hand

(10) in-i-mao, in my eye

(11) an-e-mao, round my eye

Kayser (1993: 195)

上記の *i* と *e* は一種の音便 (euphony) を表す。

ナウル語は VO 型の語順を有し、前置詞がある。この相関はきわめて一般的な関係であるが、接辞の振る舞いに関しては、抽象的である。まず、これまで概観してきたように、前置詞といった文要素に接尾辞や接頭辞が深くかかわっており、前置詞を取り巻く環境が煩雑である。そういう意味において、ナウル語は接辞的な言語である。今のところ、ナウル語が、接頭辞と接尾辞のどちらを重要視する言語か、筆者は答えを持ち合わせていない。また、上記の用例から、ナウル語には、サピア (1921) が述べた、並置法と融合法が混在する。これらは副詞句または前置詞句という名称になる。

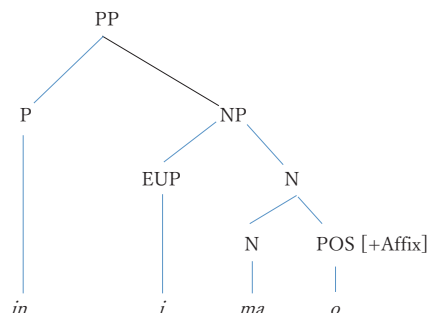
上記 (10) の構成成分構造を名称抜きで表示すると、下記ようになる。

(12) [*in* [*i* [*mao*]]]
 の中に 目 私の

名称を入れて、括弧でくくると、次のようになる。PP は前置詞句、P は前置詞、EUP は音便、NP は名詞句、N は名詞、POS は所有を表す接尾辞である。ライオンズ (1987:132) によると、「伝統文法では、前置詞を統御者、もしくは頭部としてもつ句」とされているので、ナウル語の *in* は統御者、もしくは頭部と解釈される。

(13) [_{PP} [_P *in*][_{NP} [_{EUP} *i*][_N [_N *ma*][_{POS} [+Affix] *o*]]]]

樹形図を用いて表すと次のようになる。



連結の順序は、言語によって異なるが、上記の用例は隣接の原理に抵触しないであろう。

参考文献

- Kayser, Alois (Ed.) (1993) *Nauru Grammar*. Yarralumba (Australia): Embassy of the Federal Republic of Germany.
- Lyons, John. (1981) *Language and Linguistics: An Introduction*. Cambridge: CUP. 近藤達夫 (訳)
(1987) 『言語と言語学』 岩波書店
- Sapir, Edward. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: HARCOURT, BRACE. 泉井久之助 (訳) (1957) 『言語 ことばの研究』 紀伊國屋書店